

特集

時を刻んだ

沼田の文学碑



右 秋の沼田公園に咲くセンジチウ。たつゑはさまざまな草花を愛でた。左 市内から臨む雪の谷川岳

名誉市民で戦後の女流歌人の第一人者といわれる生方たつゑや、世には知られなくても文学に情熱を燃やした文化人が多く存在し、市内各地にはさまざまな文学碑が建立されています。沼田の豊かな自然や四季、脈々と受け継がれる風習などが詠まれた文学碑をたどりま



たつゑの碑が建てられている沼田公園は市民の憩いの場。沼田女子が朗らかな表情で碑の前を歩く



結婚後もまなくのたつゑ

冬やまの
瘦せたる髪に
おきわたす
寝雪の光さびしこのくに

豊かな感受性と風景を詠む

生方たつゑ

生方たつゑ(1904~2000年)は、沼田の風景や自然の営みなど数多くの短歌を詠みました。心情の細やかさや感覚の鋭敏さが随所に表れ、和語の美しさを感じられます。

たつゑは三重県宇治山田市(現在の伊勢市)に生まれました。1926(大正15)年10月、後に沼田町長となる生方誠と結婚し、沼田へ嫁ぎました。雪をかぶった谷川岳や山に囲まれた風景を見て、郷里では出会ったことがない厳しさと寒さに不安を覚えたといっています。

2年後に長女を出産。1931(昭和6)年に、郷里の叔父から短

歌を勧められ、女流歌人の第一人者である今井邦子を紹介されました。月に一度上京し、短歌の原稿を持って師の門をくぐりました。たつゑが初めて詠んだ5首の一つ

ふりこめし
二日の雨も
はれぬれば
斑雪流れて山肌すがし

「山国の歌として地方色が出てまわっている」と、師は激励しています。1936(昭和11)年には歌集『山花集』を出版。短歌への希望をつなぐ原点となりました。

戦時中も、たつゑは防空頭巾をまとい、終戦の年まで休まずに上京し、短歌の指導を受けました。戦後は、歌壇「女人短歌」の参加や数々の歌集の出版を重ね、1958(昭和33)年、第7歌集『白い風の中で』が読売文学賞を受賞しました。たつゑは母の存在がいいつも心にあ



舒林寺の秋の花の隣に建ったつゑ歌碑。大おやのころ継ぎきて今しばし、わが秋冬を生きゆかむとす」と住職

りました。嫁ぐときに「ここはあんたさんの墓場ですよ」と言われた言葉は、どんなときも顔を上げて歩こうと奮い立たせられ、歌を詠むことに生きがいを持つことができました。愛弟子の織田澤信子は15歳で師事し、55歳で歌集『草に座す』を出版。たつゑが長期入院したときは、献身的に介護しました。

1986(昭和61)年、たつゑの歌集や随筆などを展示する「生方記念文庫」が開館し、1993(平成5)年に市へ寄贈されました。2014(平成26)年には、上之町にリニューアルオープンし、企画展の催しや愛好家が集う場所として親しまれています。

沼田女子高校2年 後藤 怜和さん

入学後に校歌について学びました。自然の中、利根川のような清らかな心で互いに切磋琢磨し、国を担う使命感が書かれています。戦前の勇ましい歌詞を本人へ依頼して変えた歴史もあつたか。とても考えて作られていると思いました。今年度、式典でのピアノ伴奏を担当。新高校統合に伴い校歌はなくなりますが、沼田生として誇りを持ち、最後まで歌っていきます。

また、たつゑは沼田女子高校や沼田中学校の校歌を作詞しており、伝統とともに受け継がれています。



織田澤信子が自宅を新築した際に詠んだ。〈新しき家の庭先遮りて 赤城の裾野ひろがりてをり〉と、自宅周辺から見える風景が句に表れている。建碑と筆は夫澄世氏によるもので、自然石の上に筑波石を重ねている



英語注釈も
生き様を歌で
生方記念文庫学芸員
手塚恵美子さん

生方記念文庫では年3回、たつゑにまつわる企画展を開催しています。所蔵品の紹介や江口きちや石田マツといった利根沼田の女流歌人などを取り上げています。「たつゑは自分に厳しい人。生き様も歌で表現しています」と手塚さん。第5歌集収録の歌「かがやけば花のにほひもこぼれくる ころやさしく寄りそうときに」は手塚さんのお気に入り。で、「幸せな人からは輝きがあふれていて、明るさを感じます」と話します。シンプルな英語でたつゑの歌に触れてもらえるよう、外国人や高校生など若い人へ向けて、英語表記の歌の注釈を展示解説に記載しています。先日はシンガポールから訪れたお客さんが喜んだといっています。



生方記念文庫所蔵のたつゑの歌集